

次元 遊魔は静かに暮らしたい。

臆病者の白兔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

次元 遊魔

こんな名前だがれきつとした女性である。

だが実は彼女は怪人を生み出す力を持っていた。

これは特番の怪人好きで自称極悪人の望まない異能を持ったが故に悩む少女の物語である。

目次

第一話 怪物生も楽じゃない

1

第一話 怪物生も楽じゃない

「ダーカーラー！ 法に縛られず何処までも自由な悪人としての怪人の魅力こそが至高なのでやがりますよ！」

私、次元^{ジゲン} 遊魔^{ユウマ}は現在、IS学園の寮で同室の青髪の子にそう言った。

「違う??弱きを助け強きをくじく正義の味方としてのヒーローの魅力こそが至高??」

私に反論する同僚??どうしてこうなったのか説明すると、私は部屋に入ってから入学前に録画していた特番ヒーローの作品を見出した事はあったんでやがりました??そしたら気付けば同僚の子も隣で食い付いて見ていたので、お互い趣味が合うと思いついたら??彼女はまさかのヒーロー派で私は怪人派と言う事が露見したのでやがります。

「はあ??わかりましたこうなったら仕方が無いでやがりますね」

「それはつまりヒーローが至高と認めたととっていい?」

「全然! この程度で妥協するなら怪人好きを名乗ってないでやがります! と、言うかお前さんこそ怪人の素晴らしさを分かりやがれ!

もはやこつからは口論だ! 聖戦じゃな! 怪人派としてのいいを見せてやがりますよ!」

私がそう叫ぶとすぐさま私は今の今までなの手この手で入手した秘宝(特典付きDVDにCDや限定フィギュアetc.)の数々の品々を全て出す。

彼女は私の意図に気付いたのか目を細める。

「??なるほど??それじゃな語る?」

何処までもこちらの覚悟を確認するかのような、鋭くも決意の籠もった真つ直ぐな眼差し、私はその瞳を同じように決意を込めて真剣に見つめながら、彼女の問いに迷わず頷いた。

「??ええ??夜明けまで語らせて頂きますよ??今日は寝れないと覚悟するでやがりますね」

そして、私と彼女のお互いの譲れない正義をかけた聖戦が、その幕

を開けたのでやがります。

翌朝??

「ふわぁー??」

翌朝??私は頭が寝てる中、身体に鞭打って教室に向かいやがりました。

昨日は結局、決着が付かないまま終わってしまったでやがりました??まったくヒーローの何処がいいんでやがりますか??ヒーローは理不尽の塊、私のような極悪人には助けにすら来ない人種でやがりますように??まあ怪人が自分を助けに来るかと言えば話は別という話になるでやがりますが??。

てか好みの作品はどれもこれも10割中9割は重なるレベルで似通ってるって言うのに、その作品の好きなものだけ対極とかもはやこれは私にとって宿敵と言っても過言じゃ無いでやがりますよ!

「やつほーユウちゃん! あれ? 眠そうだけどどうしたの〜!」
「ん? ああ??ホンネツチか??」

教室に向かうろうかで偶然にも挨拶してきた私のクラスの相席の娘??ノホトケ布仏ホンネ 本音が私に挨拶してきた。

「ふわぁ??実は昨日同室の娘とお互いに譲れないモノをかけて、朝まで激しい激戦を繰り広げたんでやがりますよお」
「そうなんだ〜」

うん??なんと言うかさつきまでの嫌な気分も馬鹿らしくなってきたでやがります。

私は気持ちを切り替えると、教室までの足を早める。

「な、そうそうユウちゃん〜」

「ん? 何ホンネツチ?」

「またモンスタームが出たらしいよ〜」

彼女の言葉に私は思わず足を止める。モンスターム??なる日突如として現れた未知の頂上の生物??その耐久力は50口径の砲撃クラスの兵器でやつとダメージが通り、最低でも三万馬力を軽く超えて

いると推定されている怪力による身体能力を有している。

それによりISでも一体を倒すのにかなり骨とされており、彼等は
その頂上のな身体能力や耐久力から、魔物即ちモンスタームと呼ばれ
ている。

私としては余り聞きたくない話題No. 1の話だ。

「??そ、そうでやがりますか??」

「うんそれでねライダーがまた現れてね〜」

私は思わずライダーと言う単語に顔を顰める。

いや??それは仕方が無い事だろう、極悪人の私にとって彼等は私の
平穩を脅かす存在でしか無いのだから。

「ん〜? ユウちゃん顔色悪いよ? どうしたの?」

私はそんなホンネツチの言葉で我に返る。

「な??な、何でもないでやがりますよ! ただ私個人としては余りモ
ンストールムとかライダーの話題は苦手何でやがりましたねえ??」

「えー! そうだったんだ〜ごめんね〜」

私に謝ってくるホンネツチ??私はそんな彼女に気にしないでとば
かりに微笑む。

「いや??まだ会って一日でやがりますし??今後から気おつけてくれれ
ば私としては問題ないでやがりますよ」

「??うん! わかったよ〜今後からは気おつけるね〜」

はあ??何とか誤魔化したでやがります??私は安堵の息を吐くと、急
に腹回りから何かがせり上がる感覚??。

「ホンネツチ!」

「へ? どうしたのユウちゃん?」

「ちよつとトイレ行ってくる!」

「え? ちよつちよつと——!?!」

私はホンネツチの呼び止める言葉を無視して走り出す。何故なら、
今の私にはそれ所では無いでやがりますから。

私は全力でトイレに駆け込むと、すぐさまIS学園の制服から下着
全てを脱ぐ。

すると私の身体は瞬く間に黒い煙に覆われ、そのまま私の姿は変

貌、ミニサイズのプリーツスカートで黒を基準とした白黒のセーラー服を身に纏い、髪や肌は真っ白に染まって、青い血管が薄っすらと手足の部位から所々に目立つように浮き出る。

歯はギザギザのサメの歯に近い形状に変化し、そんな歯を除く舌から頬や顎に至るまでの、口の中の色から、瞳や目の白い部分すらもが黒一色に染まる。

そして口元や目から赤色の液体が流れる。以前この姿を自分で鏡で見た時もこれは酷いと思ったが、もはや誰もが見ても明らかに化物と呼ぶのがふさわしい容姿だろう。私はそんな事を考えながら独り苦笑した笑みを浮かべる。

とまあ??そんな事よりも急がねば、私はすぐさま時空間の狭間をこじ開け、適当な場所に移動する。

「よし??どうやら人気のない林の中のようにやがりますね」

これは私としても都合が良い、では直ぐに始めないと??。

前屈みになると、口から黒いコルタールのような半液状の物体が流れ出てくる。

それはどんどんと出てくると生き物のように這いずりやがて膨れ上がり少しづつ形を成していく。

やがて、鋭い牙と黒く長い鉤爪を手足にもつ真っ黒くろすけで赤い目をした人型の何かがそこにいた。

「はあ??相変わらず慣れないものでやがりますなっ!」

私はそう言いながらも容赦なく私の中から出てきたその頭の頭部を蹴りなげる。

「ッ!」

そいつは蹴り上げられた事で、林の木々を何本かへし折りながら盛大に吹っ飛ぶ。

だが逃がさない、前回は逃がしてしまっただが今回は確実に仕留める。

私は時空間を移動すると、奴の元に移動する。

地面に倒れている奴??いや??モンスタームは私から逃げるために必死で走り出す。

「だから逃がさないって行ってるでやがります！」

私は容赦なくモンスタームを追いかけ、そのまま頭を引つ摺むと地面に勢いよく叩き付ける。

チツ地面が土だから余りダメージが薄い?? 私はモンスタームの頭を容赦無く踏みつける！

「死んで！ 死ね！ 死にやがれ！」

私は何度も何度も踏みつける。やがてモンスタームは身体を痙攣させてそのまま沈黙し、やがて黒い煙となって消滅した。

「はあ?? 今回は前回見たいなハマをししないですみやがりましたね」

私は現状何とかあった事に胸を撫で下ろす。

「知られる訳には行かないのでやがります私の正体は??」

私は誰に聞かせるでもなく独りでそう呟いた。

そう?? 何故なら私はモンスタームの母体、どうも私の中のストレスが一定値を超えるとこうなるらしい?? しかも生理現象見たいなもので、自分でも止められないし?? 我慢したら我慢したで複数体に増えて出てくる。

その為、出来る限り定期的に行っている訳だ、ちなみにIS学園に通っているのは身を隠す為、こうやって時空間移動して別の場所でモンスタームを殺しているのは私の正体を隠す為、仮に逃がしても出来る限り私だと感ずかせない為だ。

「しかし?? 今回は一体で良かったでやがります」

ひどい時は五く六体は出現するからなあ?? 正直今回は一番マシンだったと言わざる追えないだろう?? どうやら?? ストレス発散はそれなりに効果的なようだ?? ホンネツチ様々でなる。

まあ?? 今回の原因は恐らくモンスタームやライダーの話をかきされて、ナイーブになってしまった事だろう??。

できるなら何時もこうでなつて欲しいものだが?? 何がトリガーになるか分かったもんじゃない?? ストレス社会と言うだけに負の感情を溜め込まない生活など出来ないに等しいのだから??。

「はあ?? やっぱり『抑制者』を早く見つける必要がなるでやがりますね??」

伊達に今の今まで、幾度と無く異世界を渡り歩いていないのだ。

経験状は間違はなくこの世界にもいるはず??。早く見つけねば??
私の目的の為に??。

「さて今日はやることもやりやがりましたし帰るとしやがりますか??」

そして私は時空間の狭間を開くとすぐ様トイレへと戻るのだった。

その後は担任に脳細胞を五千個殺されたの言うまでもないでやがります。

—T o b e C o n t i n u e d —?